キューブラー・ロスの死生観
—とくに義人ヨブとの比較—

平山　正実*

Elisabeth Kübler Röss's View of Life and Death

HIRAYAMA Masami

While looking into the life history of Elisabeth Kübler Röss I studied her view of life and death. In particular, I paid attention to the view presented in her maiden work titled "The Moment of Death" (1969) in which she wrote : "patients are led to their deaths by following five steps of psychological processes".

Paying special attention to this theory, I used her autobiography as my references to find out how her view on life and death was reflected in her biography and I made an analytic study at it. Additionally, I focused on her anger at death and acceptance of death and compared her view with that of Job, a man of righteousness described in the Old Testament. In this way, I clarified the points of similarities and differences between the two and sought for a way in which people living in the modern age may accept their own illnesses and death.

キーワード：苦難、怒り、受容、ヨブ、キューブラー・ロス
key Words：distress or suffering, anger, acceptance, Job, Kübler Röss

1．はじめに

著明な精神科医であり死の専門家であったエリザベス・キューブラー・ロス女史（以下キューブラー・ロスとする）は、2004年８月24日、米国のアリゾナ州の自宅で死亡した。享年78歳であった。死亡原因は老衰と発表された。彼女を一躍世界的に有名にしたのは、1969年に出版され、25カ国語以上に翻訳された「死の瞬間」(On Death and Dying) という本である。この他20冊以上の死をテーマとする著作がある。この本は、死にゆく患者の心理に関して、人々に新しい洞察を与えると共に、独創的な理論を呈示し、患者や家族だけではなく、看護師や医師など医療関係者に大きな影響を与えた。また、死別後の遺族がかかえるさまざまな問題に光りを投げかけた。この本の発刊や彼女の生と死に関する教育・研修活動は、患者や家族の自助グループの形成やホスピス運動の発展を促し、悲嘆専門の精神療法家（グリーフセラピスト）を生み出した。彼女が呈示した「死と死にゆくこと」(Death and Dying) というキーワードは、医学、看護学、精神医学、臨床心理学、臨床哲学、社会学、福祉学などに幅広い学問分野にかかわる研究者や実践家に大きな影響を与えた。

近代以降、科学は飛躍的に進歩した。それに伴い医療技術も発展し、人類は、死を打ち負かし“永遠”を生き延びることができるかのごと

＊東洋英和女学院大学　人間科学部　教授
Toyo Eiwa University Faculty of Human Sciences Professor

き“錯覚”をもつにいたった。かくして、死を拒絶する文化が生まれた。近代科学の鎧を身につけ、理論武装した医師にとって死は敗北であり、臨床に場にあって、死を語ることはタブーになった。[1] その結果、医療の中で“人間”が見えなくなり、患者は、あくまでも客観的な物的対象であるにすぎなくなった。このように物象化された人間を治療する医師は、患者の心を癒すことを忘れた。[2] キューブラー・ロスは、医師として、臨死患者とかかわる中で、その心を救おうとした。そのため彼女は、患者を人格ある人間と見ず物と見る現代医療を厳しく批判した。彼女は、そのような考え方が一貫して、現代の科学的医療が内に孕む矛盾、つまり、それが、非人間的な疎外状況を生み出すことと鋭く指摘している。彼女は、終末期は、できれば自分の家で“自然”に迎えるべきであると主張した。彼女が、“スパゲッティ症候群”という言葉に象徴されるように、臨死状態の中で管だらけになって苦しんだり、逆にキボヤキン医師が行ったように、医療技術によって安楽死させられることに対して反対したのは、長い間の病院勤務の中で、彼女が末期医療の中にむりやり現代科学を介入させることが、どんなに人間性を否定する結果になるのかということをよく知っていたからであろう。精神科医である彼女のライフ・ヒストリーを俯瞰してみると、その生涯は必ずしも平坦なものではなかった。

病苦のため悲嘆のどん底にある人、死に対する恐怖に怯える人にキューブラー・ロスは愛をもって接し、心の平安を与えようと努めた。彼女の臨床経験は40年に及び、面接をした患者数は一万人以上にのぼるという。このように愛をもって、人々に仕えてきたにもかかわらず、彼女自身の生涯はまさに波乱万丈といってよく、病気、離婚、財産の喪失、親しい者との死別など試練の連続であった。その生の軌跡は、さながら旧約聖書に登場する義人ヨブの一生と重なるものがある。キューブラー・ロスを義人ヨブと比較する事自体、すでに故人となった彼女は同意しないかもしれない。なぜなら、彼女は自らを決して聖女ぶらず、生身の人間、平凡な人間であることを望んでいたからだ。晩年になって、6回にわたる脳卒中発作の中で、彼女は“神を呪い”、“病む自分を受け入れることができない”と叫ぶ。[1) 11)] 40年間の長きにわたって他人に仕え尽くし、しかも、さまざまな苦難に遭遇したキューブラー・ロスが、義人ヨブの生き方と重なるのは、この一点である。ヨブも病や死別、財産の喪失など、この世におけるありとあらゆる苦しみに遭遇した。その中で、自らの生き方を模索していった。その苦闘する姿が旧約聖書の「ヨブ記」の中に記されている。この義人ヨブの生き方とキューブラー・ロスの生の軌跡と重ね合わせながら、苦難のもつ意味を探ることが本稿の目的である。

なお本稿を執筆するにあたって、キューブラー・ロスの呈示した「死に至る五段階説」の中に、彼女の死生観がどのように反映されているかということを、彼女の自伝を参考にしながら分析を加えた。さらに、病や死に対する怒りと受容の問題に焦点をあて、彼女と旧約聖書に登場する義人ヨブとの考え方を対比しつつ、両者の類似点と共通点を明らかにした。このように、義人ヨブを持ち出したのは、死生学の立場を踏まえつつ、彼女の怒りと受容の本質を理解しようとすると、どうしても心理学的側面からの分析だけでは不十分で、スピリチュアルな側面、あるいは宗教的側面を考慮に入れなければならないと考えたからである。

スピリチュアルな視点とは、具体的にいうと、「人間はなぜ生きなければならないのか」「どんな苦しみにも、人間は耐えなければならないのか」といったテーマが問題になる。[3] ここで言う生きる目的や病の意味を問うといったスピリチュアリルなアプローチは、定量的な分析や単なるカテゴリー化によって、可能になるものではない。むしろ、非合理的なメタファーやシンボルが重要な意味をもつことが多い。また、スピリチュアルな観点から心の癒しについて考えていく場合は、人格全体の統合性という側面を考慮していく必要がある。

2. キューブラー・ロスのライフ・ヒストリー

本章では、まずはじめにキューブラー・ロスの生活史（ライフ・ヒストリー）を紹介したいと思う。[1)]

キューブラー・ロス（1926～2004）は、スイスのチューリッヒで同胞4人中、三つ子の姉妹の長女として生れた。ロス家は、典型的な中の上（アッパー・ミドル）クラスの家庭であった。父は、チューリッヒ最大の事務用品会社の副社長をしていて、一家の経済状態は裕福であった。父は、頑健で真面目、責任感が強く、堅実な性格の持ち主であったという。また、彼は、自然を愛し、しばしば家族とともに旅行をした。キューブラー・ロスは後に、自然ほど、神への信仰心を鼓舞するものはない。私は、大自然の中で、神への感謝をささげたと述べているが、こうした自然を賛美する心は、若き日、彼女が父としばしば自然に接するために旅行したことによって培われたものであろう。

母について、キューブラー・ロスは、「私心なく家族を愛し、4人の子を一人前の立派な人間に育てることを使命とした」と述べている。とくに「母は、人の世話をすること、愛を与えることだけに81年の生涯を費やした」と述べているように、他者に対して献身的に奉仕する立派な女性であった。

キューブラー・ロスは、父親から社会的有能さ、経営感覚、責任感、独立心、堅実さ、真面目さ、大自然を畏敬する心などを学んだ。また、母親からは、やさしさ、弱いものを思いやる心、連帯感、忍耐、寛容といった徳を学んだ。彼女は、このように、良き父と母に育てられ、幼少時から青春期に至るまで、経済的に何不自由なく過ごすことができた。このような家庭環境は、彼女の人格形成に大きな感化を与えたと考えられる。また、彼女の社会活動を行う最の基本的な姿勢に、この両親の生き方は決定的な影響を及ぼした。

キューブラー・ロスは、生誕時900グラムしかなく、ほとんど育つ見込みがなかったと、彼女自身、述べている。しかし、長ずるに及んで、頭角を現し、とくに算数と語学では抜群の成績を修めた。その意味で、彼女は、文学や哲学など人文科学系の才能よりも、物事を合理的に考える理数系の才能に秀でていたように思われる。事実、父は、彼女の理数系の才能を早くから見抜き、彼女を自分の秘書兼帳簿係に登用しようとした。他方、彼女は、生まれた時、育つ見込みがないといわれたこともあってか、常に弱者といわれる人々に目を向けた。彼女が幼少時、弱い子や障害のある子の味方となり、彼らを守ろうとしたことが自伝に記されている。また、尊敬するアルベルト・シュワイツアーがアフリカでしたように、インドの貧しい人々の村で開業することを夢見ていたという。また、彼女の動物好きは有名で、傷ついた小鳥、猫、蛇など小動物を探してきては、彼女が造った「私設研究所」に保護し、死んだ時は、共同墓地に埋葬し、これらの動物を丁重に弔った。このような弱い人々、傷ついた動物への愛は、彼女の出生時から虚弱児として生きてきたという体験にさかのぼることができるかもしれないが、むしろ、彼女の本質的な感性と深くかかわっているように思われる。そのヒューマンな姿勢は、終生変わることはなかった。人間愛にあふれる言行は、彼女の生涯を貫いている。

彼女は、二十代前半にボランティアとして、国際平和義勇軍の一員として参加、第二次世界大戦後の傷跡が癒えていないポーランドのワルシャワにおける再建のための救援活動や、ベルギーの炭鉱町で、緊急治療と看護活動に従事している。こうした活動に対し、両親は地雷や飢餓の危機を憂いて反対した。しかし、彼女は「行くべき場所があり、助けるべき人がいる限り、わたしは前に進まなければならない」と答え、自分の意志を翻そうとはしなかった。そして、ポーランド再建のための救助活動に行った際、立ち寄ったナチスドイツの悪の象徴であるマイダネック、ダッハウ、ブーヘンヴァルトなどの強制収容所を訪問したことが、彼女の生涯に決定的な影響を及ぼした。つまり、この訪問が「苦しむ者に対しての愛の奉仕をしよう」と

いう決意を促すいわば原体験となった。この頃から、医師になろうとする願望が強くなり、1950年（24歳）に医学部を受験、合格した。医学部生活の中で、最愛の伴侶であるマニーと結婚、卒後、マニーの母国である米国に移ることになる。結婚後、一男一女の母となるが、彼女の苦しめる人々への愛の姿勢は変わらなかった。最初の就職先であったマンハッタン州立精神病院では、患者が隔離され虐待を受けている姿を見て、彼女は、「患者に必要なのは薬ではなく、思いやりだ」と言い、これまで行われてきたサディスティックな対応を廃し、統合失調症の患者の94％を退院させ、地域の中で自立した生活を送れるようにした。[4] この頃のことを回顧して、彼女は「知識は助けになるが、知識だけで人を助けることはできない」と延べ、精神障害者に対するケアの重要性を主張した。次いでモンテフォール病院に移り、リエゾン・コンサルタントとして、筋萎縮性側索硬化症の患者を診察しながら、死にゆく患者の研究を始めている。彼女はこの時、死にゆく過程に関する研究をする際に、最も大きな影響を受けたのはユングであったと述べている。さらにコロラド大学やラビーダ小児病院で死にゆく患者に関する診療・研究・教育を重ねていく。また、病院以外の社会奉仕活動に熱心で、シカゴの盲人を対象とする施設であるライトハウスで、盲人の子どもの世話をしたり、刑務所内に服役しているエイズ患者のためのホスピス設立のために尽くしている。彼女は、従来の刑務所が隔離、収容するだけの機能しかもっていなかったことに対して批判し、刑務所であっても行き届いた医療体制やカウンセリング、落ち着いた環境、美味な食事が与えられるべきだと主張している。

さらに彼女は、診療以外に数多くの執筆や講演、ワークショップ[5]、募金活動などを行っている。また、エイズ感染児を養子にする運動に参加したり、死別体験者、末期患者、エイズ患者及び彼らをケアするスタッフらを対象とする癒しと研究、教育、研修を目的とした「シャンティ・ニラヤ・ヒーリングセンター」を創設した。ちなみにシャンティ・ニラヤとは、「やすらぎの終の住処」という意味である。

このように、彼女の働きを俯瞰してみると、一貫して悩み苦しめる者、悲しむ者、不安の中にある者を救済しようとする姿勢が見えてくる。このような事柄は、彼女の“光”の部分である。彼女の周囲の人々に対するこうした態度から判断すれば、彼女は愛の人、あるいは義人と思えてくる。もちろん、彼女を偶像化することは慎むべきである。しかし、これほどまで、一人の女性として広範囲に社会貢献した人は稀ではないだろうか。

ところで、筆者は、義人「ヨブ」にちなみ義人「キューブラー・ロス」という名称を与えたい。そこで、そもそも「義」とはいかなる意味を有しているのかという点について、ここで若干触れておく。冒頭で筆者は、キューブラー・ロスの死生観とヨブのそれとの比較を本論文のメインテーマとして掲げた。そのヨブとは、旧約聖書「ヨブ記」に登場する人物であり、「無垢な正しい人」（ヨブ記１：１――以下引用は全てヨブ記より）であったと記されている。この「正しい」という言葉の原語は、義〔sedeq〕である。[6]「義」の意味するところは、弱い者、貧しい者を保護すること、つまり、このような者を恵み、憐れみ、助け、癒し、救うことを意味している。さらに、この「義」という言葉は、ヨブ記が記された紀元前５世紀後半から紀元前２世紀になると、「施し」「仁愛」といった意味に深化している。[6]

このような「義」という語義を踏まえて考えると、ヨブが、いかに「義」しい人であったかということが、次の文章を読めばよくわかる。「わたしのことを聞いた耳はみな祝福し、わたしをみた目は皆賞賛してくれた。わたしが身寄りのない子らを助け、助けを求める貧しい人々を守ったからだ。死にゆく人さえわたしを祝福し、やもめの心もわたしは生き返らせた。わたしは正義を衣としてまとい、公平はわたしの上着、また冠となった。わたしは、見えない人の

目となり、歩けない人の足となった」(29：11－17)。「わたしは、嘆く人を慰め、彼らのために道を示してやり、首長の座を占め軍勢の中の王のような人物であった」(29：25、以上すべて傍点筆者)。

この記事とキューブラー・ロスの社会的活動を照らし合わせてみよう。彼女の前半生のいろいろな活動は、1969年、アメリカで最も権威があり、しかも影響力のある雑誌「ライフ」が、彼女の大学における死にゆく患者との面接記事を掲載してから有名になり、当時タブーとされていた末期患者の心理分析及び治療に挑戦するパイオニアとして「賞賛」された。また、死にゆく患者は、彼女を「祝福」し、エイズにかかっている孤児、つまり「身寄りのない子」を助け、未亡人の悲嘆体験者の自助グループを援助し、「やもめの心」を生きかえらせた。また「見えない人の目となった」と記されているように、彼女は盲人のためのライトハウスで盲目の子どものためにボランティア活動に従事した。さらに、戦後のポーランドのワルシャワやベルギーの炭鉱町で「貧しい人」のための緊急治療や看護活動を行っている。

彼女の全生涯は、まさに「嘆く人」を慰めるために捧げられ、しかもあらゆる場所で苦しんでいる人々に「道」を示し、しかも生と死に関するテーマに関する研修、教育、啓蒙活動においては、常々「首長の座を占める」と記されているようにリーダーとしての役割を担い続けたのである。

このように見てくると、キューブラー・ロスとヨブとは、「義人」という点では共通している部分が多くある。また、ヨブは、「東の国一番の富豪」であり、子宝にも恵まれ、彼の手の業はすべて祝福されていた（1：2，10)。キューブラー・ロスも裕福な家庭に生まれ、青春期に至り独立するまで、何不自由ない暮らしをし、伴侶も希望通り同級生の医師と結婚、立派な子供達が与えられ、生活は安定していた。この点でも彼女とヨブとは共通している。

3．キューブラー・ロスの悲嘆体験

キューブラー・ロスの一生を振り返ってみると、前章で記したような“光”の部分だけでなく“影”の部分もたくさんあることに気づかされる。彼女の生涯における“影”の部分とは、一言で言えば、「悲嘆体験」というキーワードでまとめることができるように思われる。悲嘆体験とは、言葉を代えて言えば、死別や離別体験であり、物やからだの喪失体験である。こうした体験はいずれも悲しみや不安、怒り、抑うつといった感情を伴う。

キューブラー・ロスの生涯における悲嘆体験は、大別すると三つの領域に分けられる。第一は、人と人、人や動物など生きている命との「関係性」の喪失体験である。彼女にとって最初の大きな試練は父との関係性が問題になった。彼女は元々動物好きで、その中でもとくにウサギをかわいがっていた。ところが父はお金を節約する目的で、彼女が最もかわいがっていた黒いウサギを肉屋にもっていって殺し、料理して食卓に載せるように命じた。結局、彼女は、父の命令に従った。彼女はそのウサギの肉を食べなかったが、家族の者はみんなそろってその肉を食べた。この出来事は彼女にとってショックで、終生忘れ得ない心の傷として残った。この事件を契機として、彼女と父との信頼関係は失われた。この悲嘆体験は、晩年における彼女の怒りの爆発と深いかかわりがある可能性がある。[11) 15)]

彼女は、結婚後二回の流産を経験する。後年、この流産がいかにつらく悲しい体験であったかということを再三語っている。また、彼女はその生涯において三人の愛の対象、つまり、父、母、夫であるマニーと死別している。さらに、彼女が人と人との関係性の喪失の中で、最も心を痛めた事件は、最愛の夫マニーとの離婚である。その理由は、彼女が仕事と家庭のバランスを崩したことや、価値観の相違によるところが大きいと考えられるが、彼女にとって、夫との離婚が大きな心の傷となったことは間違いない。また、彼女は、さまざまな悲嘆体験をもつ

人々を支える活動を行っていたが、その仲間に裏切られたことも辛い体験であったであろう。

このように見てくると、彼女の一見華やかな研究、教育、診療活動の背後に、さまざまな影の部分、つまり人と人との関係性の中での見捨てられ体験、死別や離別体験、裏切り体験などを有していたことは、晩年における彼女の言行を理解する上で記憶されるべきである。

第二は財産の喪失である。キューブラー・ロスは、人生の絶頂期に末期患者やその家族、エイズ患者、配偶者や子どもを亡くした遺族、暴力を受けた妻や子ども、さらにはこのような悲しみの中にある人々を支える援助者のために「生・移行・死」と題したワークショップを行うために「シャンティ・ニラヤ・トレーニングセンター」を創設した。ここでは1週間の短期間、集中型の体験学習が行われた。このヒーリングセンターは、夫のマニーが土地を購入、妻であるキューブラー・ロスがリース契約を結んで設立された。ところが、夫婦が離婚したために、夫はその土地を第三者に売却した。その結果、このセンターが行う事業は途中で挫折することになった。その後、彼女は農村に移り、出版と講演で得た凡ての収入を投入し、自分の家と来客用の宿泊施設を作り、そこを「キューブラー・ロス・センター」と名づけ、さまざまな活動を行った。さらに、エイズに罹患した子どもに対するホスピスを設立しようと計画した。しかし、この計画に対しては、周辺住民から猛反対を受け、彼女は迫害者から追跡され、家の窓は銃弾で打ち砕かれ、家畜も殺された。そのために、この計画も中断せざるをえなくなった。[7] 彼女はこのように迫害と孤独に耐えながら、講演や研修活動に没頭していった。ところが旅行中、突然、自宅を兼ねた「キューブラー・ロス・センター」が原因不明の火災を起こし全焼した。この火災によって、彼女が長年の間蒐集してきたケース記録など関連資料の一切が灰じんに帰した。このように彼女は晩年になって、自らの家、重要な学術的資料、原稿、図書、訪問者のための宿泊施設、研修のためのホールなど、彼女の所有している財産の大部分を失った。

自宅が火災を起こし全焼したことにより、彼女は再建計画を志したが、息子が反対したので、土地は十代の青少年の心のケアをする団体に贈与し、自分は、自由に思索できる静寂な環境を求めてアリゾナ州の砂漠の中にある土地を買い、小さな家を建てた。この家で彼女は最晩年を過ごすことになる。

第三に、彼女の身体の病に伴う悲嘆体験について考えてみたい。住民による迫害、放火による自宅の焼失、毎週100通に及ぶ手紙に目を通し返事を書くこと、頻繁にかかってくる電話、全世界から依頼される講演、ワークショップ、施設建設のための募金活動、病院訪問、さらには自宅周辺の自然環境を破壊する豪雨や洪水の到来、干ばつ等によるさまざまなストレスに、キューブラー・ロスは心身ともに衰弱していった。晩年、彼女は、わたしは多くの人々を助けたが、わたしを助けてくれる人はいない、孤独であると語っている。[1] このようなさまざまなストレスを緩和するため、彼女はコーヒー、タバコ、チョコレートを過剰に摂取した。こうしたライフスタイルは、「生活習慣病」を誘発することになった。62歳のとき、彼女は脳卒中発作を起こし、舌のもつれ、発語障害、右半身マヒが現れた。以後、彼女は死亡するまで、合計6回もの脳卒中発作に苦しむことになる。70歳から71歳にかけては連続して脳卒中発作を起こし、この時を境に、完全に人に依存する生活を送らなければならなくなった。また、マヒによる痛みと歩行障害、発語障害のため、心身の苦痛は極限に達し、「正直なところ、もう卒業したいと痛切に願っている」と述べるようになる。[10] しかし、彼女は、この時から、さらに7年もの長きにわたって、脳卒中の後遺症に悩みながら、余生を送らなければならなかった。

ヨブの場合はどうか。ヨブはすでに述べたように、大富豪であった。ところが天災や略奪によってその財産を失ってしまう。また、最愛の子どもも災害によって死亡する（1章）。その

ような災禍や敵に襲われ、財産と子どもを失ったヨブに対して、ヨブの妻は、彼を慰めるどころか、「神を呪って死ぬほうがましでしょう」（2：9）と冷たく突き放す［註1参照］。そして、さらに大きな試練がヨブを襲う。彼は、頭のてっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかかった。そして「灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった」（2：7）。

ヨブは再三にわたって訪れるさまざまな試練に対して、「恐れていたことが起こった。危惧していたことが襲い掛かった。静けさも安らぎも失い、憩うこともできず、わたしはわななく」（3：26）「どうか、過ぎた年月を返してくれ」（29：2）「平穏に暮らしていたわたしを神は打ち砕いた」（16：12）「もうわたしは疲れ果てた」（17：17）「もうたくさんだ。いつまでも生きていたくない」（7：15）「わたしは自分自身の生まれた日を呪う」（3：9）と述べている。ヨブの苦しみがどんなに深く厳しいものであったかということがよくわかる。

さらに、ヨブが逆境に陥ると、それまで親しかった友人や親類、兄弟、そして妻さえもが、ヨブを捨てて遠ざかっていった（19：13－14，19：17）。別の箇所でヨブは次のように述べている。「彼ら（彼らとは友人や親戚を指す）はわたしを忌み嫌って近寄らず、平気で顔に唾を吐きかけてくる」（30：10－12以下）「彼らは生意気にもわたしの右に立ち、私を追い出し、災いの道に行かせ、逃げ道を絶ち、滅びに追いやろうとする。それを止めてくれる者はない」（30：12）「もはや、わたしは息も耐えんばかり、苦しみの日々がわたしを捕らえた。夜、わたしの骨は、刺すように痛み、わたしをさいなむ病はやすむことがない」（30：16－17）。

以上がヨブが自らの心の奥底を自己洞察し、率直にその気持ちを告白した箇所である。ヨブ記の筆者が生きていた時代は、バビロン捕囚期以後のペルシャ時代、おそらく紀元前5世紀前半と想定されるが、彼の心的世界は、民族差、時代差を越えて普遍性をもち、現代に生きるわれわれの心と通底するものをもっている。

キューブラー・ロスも死に至るまでの16年間というもの、「刺すような痛み」とマヒによる歩行障害のため、毎日、ほとんどベッドに拘束されるという「苦しみ」に耐えなければならなかった。[1) 11)] また、晩年はエイズに罹患した子どものホスピスを建築しようとした時、周辺住民に窓ガラスを銃で撃たれたり、動物を殺されたり、放火にあったりした事件に象徴されるように、ひとびとは彼女を「追い出し、災いの道に行かせ」「滅びに行かせよう」とした。さらに夫や子どもまでが彼女から離れていった。まさに「兄弟たちは、わたしから遠ざかり、知人は離れた」のであり、「親族もわたしを見捨てた。友達もわたしを忘れた」のである。最盛期には、多くの人々がキューブラー・ロスのところに救いを求めてきたが、そうした人々は、彼女の晩年にはほとんど訪れようとはしなかった。「シャンティ・ニラヤ」の仲間たちも、彼女の家が火災に遭遇した時、救いの手を差し延べようとしなかった。キューブラー・ロスも、最後の頃は、「もうこれ以上生きていたくない」「わたしは疲れ果てた」[10)] とヨブと同じようなことを言っている。このように見てくると、彼女とヨブの喪失体験、さらにはその苦悩と周囲の人々の対応が非常に似ていることに気づかされる。

4．怒りについて

キューブラー・ロスは、晩年になって、さまざまな人生の試練に遭遇した。その範囲は広く深く、身体的、心理的、社会的、霊的な苦痛を伴った。とくに彼女を苦しめたのが、身体的苦痛であった。62歳の時、最初の脳出血の発作に襲われ、右半身マヒと舌のもつれによる発語困難、右腕の不自由さを訴えた。以後、彼女はなくなるまで合計6回の脳血管系の発作に耐え、実に16年間に及ぶ闘病生活を強いられたのである。最晩年は、マヒのために部屋を移動することもままならず、一日15時間もベッドの上に座っていなければならなかった。行動は極度に制限され、自分でお茶を入れることさえ

ままならず、簡易トイレに行くのがやっとという状態が死ぬまで続いた。わずか数時間ベッドから寝椅子に移り、外の自然や小鳥を見るのが、なによりの楽しみであったという。週2回ヘルパーが来る他に、家族をも寄せ付けず、全く一人で生活していた。[11)]

彼女自身、自分は40年間にわたって、神に仕え、世界中を駆け巡り一万人以上の死にゆく人々を支えてきた。それなのに、人生の卒業時期である晩年になって、どうしてこのような仕打ちを受けなければならないのか。彼女はたしかにワークショップでは聴衆に対して「みんなで自分を愛すること、自分を許すこと、いつくしむこと、理解することを身に付けましょう」「そうすれば、その贈り物を他の人に与えることができるようになります」と言っている。[8) 11)] それにもかかわらず、死ぬ3年前には「私は、神を呪う。神はヒットラーだ。今の自分に嫌悪感を感じる」と述べている。[11)] この矛盾はどう考えたらよいのか。彼女は、40年間、自分が行ってきた研究、教育、治療、ボランティア活動に対する自負心があったことに違いない。それゆえにこそ、長期間にわたって、自らの体が病気に侵され、苦しまなければならないことに納得がいかなかった。彼女は「死そのものはすばらしい肯定的な経験だが、わたしのように引き伸ばされた場合（脳卒中の発作から16年間、6回の発作に襲われたことを指す）、死に至る過程は悪夢になる」[9)]「それは、人間のあらゆる能力、とくに耐える能力や平静でいられる能力をしぼりとる」「正直なところ、もう卒業したいと痛切に願っている」と述べている[10)] 病苦は、彼女にとって、不条理なことであった。彼女は、自分が年老いたからといって、頭がボケていない、頭脳は極めて明晰であると自ら述べている。[11)]

次に、重病に罹患するという限界状態の中にあって、なにゆえに彼女は「神を呪い、自己を否定」せざるをえなかったのか[1) 11)] という点について、彼女のライフ・ヒストリーを横断的に俯瞰したいと思う。まず第一に、幼少期における父親との関係について考える。冒頭でも述べたように、キューブラー・ロスは、1926年、スイスのチューリッヒの裕福な家庭に生まれた。父は、事業家として成功していたが、娘たちには厳格なしつけをほどこした。三つ子の長女として生まれたキューブラー・ロスは、五人兄弟の仲で、最も優秀であったがゆえに、父の期待も大きく、彼の秘書になることを勧めた。しかし、独立心の強い彼女は、その勧めを拒否し、医学の道を志願した。そのため、父は激しく怒り彼女を勘当した。

彼女にとって、もう一つ忘れられないエピソードがある。彼女は、もともと動物好きであった。傷ついた小鳥、猫、蛇、カエルなど小動物を探してきては、私設の「研究所」で保護し、「共同墓地」に埋葬した。その中でもウサギを最もかわいがっていた。ある時、父は、彼女が一番愛していた黒ウサギを、飼育に要する経費を減らす目的で近くの肉屋に行って、殺してくるように命じた。彼女は、父の命令に逆らうことができなかった。しかし、その肉を家族一同で食べる姿を見ながら、彼女はひどく傷ついた。彼女は、この時、「自分は愛されていないのだ」ということに気づくと同時に、後述するように、父を「悪い対象」として、心の中に内在化させた。

第三のエピソードとしては、宗教主任とのかかわりについて言及する必要がある。高校時代、宗教主任が、ある生徒が犯しささいなミスに対して、懲罰的態度をとったことに対して、キューブラー・ロスはひどく怒り、そのような態度は生徒への虐待行為であるとし、授業をボイコットするということがあった。以後、彼女はキリスト教行事に参加することを拒否するようになる。彼女は、神は建物の中に存在したり、規範や慣習で縛られるものではないと主張している。

後に、彼女は、シカゴのルーテル神学校から教師として働くようにと招聘を受けるが、半年で止めている。[12)] その理由としてスケジュールが過密になってきたことに加えて、「わたしは、自分の宗教嫌いを含め、ありとあらゆる理由を

述べ立て、その申し出が見当違いなものであることを述べた」と言っている。彼女は、「患者のほとんどは、病院付きの牧師と話したいとは言わなかった。その理由としては、牧師は、聖書の言葉を棒読みにして、患者の真の疑問に答えようとしなかった」と語っている。このように、当時の彼女は、伝統的なキリスト教とは、一線を画す態度を取り続けた。しかし、16歳の時に、父の勧めで、三姉妹とともに堅信式を受けることには同意しているし、自然の中に神が宿っていることは信じて疑わなかった。彼女は後にその神を宇宙意識とか光とかいう言葉を使って表現している。

第三に、母の死に直面した時、キューブラー・ロスがとった態度について考えてみよう。彼女の母は、81歳の時、脳卒中で倒れ、植物状態に陥った。この時、彼女は「母は私心なく、家族を愛し、4人の子どもを一人前の立派な人間に育てた」「一生涯にわたって、母は人を世話すること、愛することだけに尽くした」「その母が、なぜ植物状態のまま、4年間も寝たきりになったのか、自分はわからない」「わたしは、葬儀の時、神の無情を呪った」と述べている。さらに彼女は問う。「神さま、あなたはどこにいるのですか」「第一、あなたは実在するのですか」「あなたは、何を考えておいでなのですか」「わたしは神を口汚くののしった」「しかし、それでも神はなんの反応もなかった」と。[13] このように、神に対して怒りの言葉を投げたのは彼女が48歳のときである。この時、すでに彼女は、“義人”である母の病苦という不条理に対して、神に対してはっきりと異議申し立てを行っている。「神を呪い、口汚くののしる」という彼女の姿勢は、晩年になって、自らが病の床に伏した時、“反復強迫”（フロイト）するかのように、繰り返されることになる。

彼女は、父親や牧師や父なる神など、権威ある存在に対して、なにゆえ怒り、異議申し立てをしたのであろうか。その鍵を解くためには、彼女の自我構造における人格的な問題について、メスを加える必要がある。筆者は、この世の中でエリートといわれる経営者、教師などが終末期に至り、怒りを表すことが多いとし、その理由として、幼少期の見捨てられ体験と境界型人格障害との関連性に言及しつつ、終末期においては、身体が、自尊心の強い自分を見捨てるがゆえの怒りであると指摘したことがある。[14]

W.R.D.フェアベーンは、人格の対象関係論の中で、この問題について論じている。[15] 彼の人格対象関係理論によれば、人生の早期において、対象剥奪と欲求不満が生じると、自我は耐え難い重圧を感じつつ、そのような状況に陥れた悪い対象を内在化させ、さらに、その内在化された悪い対象は抑圧されるという。そして、この抑圧は、ただ単に内在化され悪い対象に向けられるのではなく、内在化される悪い対象との関係を求める自我構造にも同じように向けられる。その際生じる抑圧は、対象関係の中で出会うさまざまな重圧や困難に対処しようとして、自我が用いる防衛技術であるとされる。前述した反復強迫も、抑圧された悪い対象への大規模な回帰現象であるという。なお、この内在化された悪い対象のリビドーの備蓄がほどよく解消されるためには、抑圧された悪い対象が再び意識野に戻ってくることが、治療の上から必要であるとされる。[16] その意味でも、怒りは危機的状況の中にある患者の自己治療の過程であると考えることができるだろう。しかし、ただ抑圧された悪い対象が意識野に戻ってきさえすれば、それで治療が成り立つわけではない。リビドーは、対象希求的である。そう考えていくと、患者が発信するさまざまな症状や行動は、リビドーの対象希求を表すメッセージであると解釈される。このような視点に立つと、患者の前に彼らを支える優れた援助者が現れ、患者との間で良い対象関係、つまり信頼関係が結ばれる必要があるだろう。

以上の理論を踏まえた上で、キューブラー・ロスの怒りの心理機制を分析してみよう。彼女は、黒いウサギを死に追いやった厳格な父、同級生の生徒に虐待とも思われる懲罰的な態度をとった宗教主任、病に苦しむ患者を全く理解せ

ず放置した病院牧師、さらには母[19]や自らに過酷な病を与えた神を、悪い対象として内在化させ抑圧させた結果、自我が欲求不満と耐え難い重圧を感じ、そのリビドーが最晩年になって、怒りとなって一挙に噴出したものと解釈される。

ところで、精神療法的観点から見るならば、怒りをこのように内在化された悪の対象とみなし、そのような自然感情を解放することが、自己治癒に至るプロセスであるととらえ直すことであると考えられてきた。[18] 精神療法の目ざすことは、抑圧されているものを解放すること、正直であること、自己のアイデンティティーを守ること、関係性への問題提起などを含んでいる。[17] しかし、スピリチュアルな次元でのケアにとって大切なことは、人間の全体性の中での存在意味が問われ続けなければならない。[17] キューブラー・ロスの場合、他人に対しては愛を施したが、自ら愛されること、愛を要求することが苦手であった。彼女が、父親を悪い対象として内在化したということは、よく考えてみると、父親が娘キューブラー・ロスを快く思わなかったということであり、そのような気持ちに父親をさせたこと自体、彼女は強い罪責感をもつにいたったと考えられる。そのことが、彼女の自我構造の人格的芯部に影響を及ぼし、彼女が自己嫌悪に囚われた原因であると思う。スピリチュアリルな観点からみれば、このような自他に対する攻撃性（怒り）は、罪責感が関与しているがゆえに宗教的、霊的介入が必要になろう。そして、この彼女の霊的（スピリスアル）部分に自他に対する攻撃性、つまり怒りの源があるように思われる。

ところで、ヨブも、人生における不条理に対して、ヨブ記において、随所で怒りの言葉を発している。冒頭でも記したように、ヨブは、正しく無垢な人間であると自他ともに認めていたにもかかわらず、災禍によって子どもや財産を失い、友人や妻から見捨てられたばかりでなく、自分も重い病気に罹患した。

ヨブはテキストの中で次のように述べている。「わたしは口を閉じてはいられない。苦悶のゆえに語り、悩み嘆いて訴えよう」（7：11）。そして、神への怒りの言葉を吐く。あなたは「わたしがよびかけても返事はなさるまい。わたしの声に耳を傾けてくださるとは思えない」（9：15）神は「理由もなく、わたしに傷を加えられる」（9：17）そして、「息つく暇も与えず、苦しみに苦しみを加えられる」（9：18）「罪もないのに、突然鞭打たれ、殺される人の絶望を神は嘲笑う」（9：23）「なぜ、あなたは、御顔を隠し、わたしを敵とみなされるのですか」（13：24）

このように、ヨブは自らの窮状を必死に訴えるだけでなく、神は、自分を敵と見做し、鞭打ち、嘲笑し、傷つける存在としてとらえている。しかも、神は自分の訴えに対して、なにも応答しないと怒っている。また、見舞いに来た友人たちにも「あなたたちは、皆慰めるふりをして苦しめる」（16：21）と非難している。「もうたくさんだ。いつまでも生きていたくない。ほうっておいてください。わたしの一生は空しいのです」（7：16）といった虚無的で、自暴自棄的な言葉も見られる。あげくのはては、自分は「自分の生まれてきた日を呪う」（3：9）とまで言っている。このようなヨブの心の奥底から絞り出されるような苦しい叫びを聞いていると、キューブラー・ロスの晩年の脳卒中の後遺症に苦しむ姿と重なってくる。

5．試練について

キューブラー・ロスが死にゆく患者の心理を分析して、否認、怒り、取引、抑うつ、受容の五段階を経過して死に至ると主張したことは有名である。もちろん、彼女は全ての事例でこのような経過をたどるわけではなく、行きつ戻りつするケースや、途中で死が訪れるケースもあると記している。[27] 五段階の中で、否認や怒りの時期は、自らの感情の“洪水”に覆われ視野狭窄に陥っていて、病や死という現実を受け入れることができない段階である。否認の対象は病気に向けられる。怒りの対象は徐々に広がり、

自分の病気だけでなく他者や神にも向けられる。取引の時期になると、多少自己洞察ができるようになり、病や死と向き合えるようになって、やり残した仕事を行おうとしたり、神に対して善行を行うから延命してほしいと交換条件を出したりするようになる。死や病が取引の対象となるような生易しいものではなく、しかも、神が人間の訴えになにも応答してくれないことがわかると、うつの段階に移行する。この時期には、怒りは内向し、攻撃の矢は自分に向けられ、罪責的、虚無的になったり、自暴自棄になって、病勢が悪化すると自死に至る危険性がある。このように、取引の段階は、次のステップの抑うつの段階に移行し、破壊的思考に囚われ、自暴自棄的、虚無的になるか、さらに成長して死を受容できる段階にまでたどり着き、平安な死を迎えることができるかという分岐点に位置しているように思われる。つまり、取引の段階における人間の構えや姿勢が後の“予後”を決定するのであって、その意味でもこの時期は心が揺れ動く段階であり、それゆえにこそ、試練の時であり、相手と心を開きコミュニケーションもできる可能性のある時期であることから、この段階は教育的働きかけや自らの意思決断ができる時期である。

彼女は、「わたしは、たえまのない痛みとマヒによる運動制限に苦しめられて、それは人間のあらゆる能力、とくに耐える能力や平静でいる能力をしぼりとる」「わたしのように死が引き伸ばされた場合、死に至る過程は悪夢になる」「わたしは、24時間、誰かの看護に依存するようになった。責任をもって相手に対応できない苦しみもある」「50年間、だれにも依存せずにやってきた者にとって、依存は学ぶことの困難な教訓である」「正直なところ、もう卒業したいと痛切に願っている」と告白している。[19] 彼女がこのような心境に達したのは、1997年であるから、亡くなる7年も前である。この時期に、このような否定的、破滅的思考に彼女が囚われていたことは、その苦難がどんなに深刻なものであったかということを意味している。以後7年間も彼女がこのような苦しみの中にあったことは、彼女が長期間にわたりわれわれの想像を絶するような試練に遭遇していたといえるだろう。

他方、この時期（1997年＝74歳）に、ドイツの週刊誌のインタビューに応えて、キューブラー・ロスは「非常に長い間、怒りの段階にいたが、今は抑うつと受容の中間のあたりにいる」と語っている。[21] そして、「なぜ、神がこんな苦しい病を人間に与えたのか」という問いに対して、彼女はこう答えている。「学校の先生が、一番優秀な生徒に対し一番難しい宿題を与える」と応えており[10]、さらに続けて「わたしは、苦難から辛抱すること、従順になることを学んでいる」「どんなに難しい教訓であろうと、創造者には計画がある」[10] と述べている。苦難の中にあってこのように答えられたのは、彼女が近年問題にされているスピリチュアリティの本質である忍耐や尊厳、同情といった倫理をマスターしていたことを示唆している。[2] 彼女は、生きている人間は、さまざまなレッスンを課せられる。辛い経験をすればするほど、その人は、そこから学び成長するのだ[20] と言いたかったのだろう。彼女は、祖父が苦しみの内に死んでいった姿を見た父が「きっとこの苦しみで償っているのでしょう」と言った言葉を共感をもって記している。[23] また、彼女は「すべてが完璧だったら、成長なんかできっこない。苦しみは人が成長するために天が与えた贈り物であり、ちゃんと目的があるのだ」と述べている。[24] 確かに、逆境は人間を成長させ、教訓を学んだ時、苦痛は緩和される。しかし、彼女の場合、学べば学ぶほど、課題は難しくなっていくように思われる。

ヨブの場合はどうか。ヨブも財産や子どもを失い、妻や友からは疎んじられ、自らも病気にかかった。彼は、人から責められるような大きな罪も犯さず、「無垢で正しく、神を畏れ、悪を避けて」いた。このことが義人ヨブといわれるゆえんである。ところで彼が苦難に遭遇している真最中に、3人の友だちがやってくる。こ

の3人の友人は、ヨブが苦難に出会っているのは、あなたが罪を犯しているからだと忠告する。彼は、勧善懲悪的思想に基づいてヨブを裁いた。これに対して、ヨブは猛然と反発する。「ここで三人はヨブに答えるのを止めた。ヨブが自分は正しいと確信していたからである」(32：1)。ところが、ヨブ記をよく調べてみると、後半の部分で、もう一人の不思議な人物が現れる。それがエリフである。彼は、ヨブのところに訪れた3人の友ともヨブとも、一定の距離をとっている。エリフは、「ヨブが神よりも自分のほうが正しいと主張するので、彼は怒った」「また、ヨブの三人の友人で、ヨブに罪のあることを示す適切な反論を見出せなかったので、彼らに対しても怒った」(32：2－3）と記されている。つまり、エリフという人物は、苦難に対するヨブ及びその苦しみを慰めに来て結局彼を説教した3人を客観的かつ冷静に見ている。

ヨブが「わたしが正しいと主張しているのに（神はわたしが）口をもって背いたとされる。無垢なのに、曲がった者とされる」（9：20）「罪もないのに突然鞭打たれる」（9：23）と言っていることに対して、エリフは、「ヨブは、よくわかって話しているのではない。その言葉は思慮に欠けている。悪人のような答え方をヨブはする。彼を徹底的に試すべきだ。まことに彼は過ちに加えて罪を犯し、わたしたちに疑惑の念を起こさせ、神に向かってまくしたてている」(34：36－37）と。苦難の中で神をヒットラーだと言い、その神を呪うと言った[11] キューブラー・ロスの苦渋に満ちた訴えとこのエリフの言葉を照らし合わせてみると、重なりあうところが多い。さらに注目すべきことに、ここでエリフは、教育者としての立場から、ヨブを「徹底的に試すべきだ」と主張していることだ。試すとは、文字通り試練にあわせるということであって、キューブラー・ロスの言葉で言えば、レッスンを課することに他ならない。[20] つまり、エリフは、人間は試練を受けることによって、その人格的本性が明らかになるという考え方を示している。エリフは、ここで、苦難は人間の罪の現実を開示するとともに、苦難に伴う試練の機会が、成長の契機ともなりうることを主張する。

エリフは、さらに苦難が、最終的には人を教育し、殊に義人をその宗教的高慢から救うための有力な“武器”となることを強調したかったのであろう。この点において、病や死などの苦難を、人格的に成長するためのレッスン（教育）ととらえたキューブラー・ロスの思想と共通するところがある。

6．受容について

キューブラー・ロスは、受容の段階について論じている中で、この段階が諦念的、絶望的な「放棄」を表しているのではなく、また、幸福な段階と誤認してもいけないと述べている。彼女によると、受容とは、感情がほとんど欠落した状態であって、しかも闘う意志が低下、休息しているような状態であると言っている。[27]

また、この段階は、乳幼児が自分の欲するものがすべて与えられ満たされている、いわば原始的ナルシシズムに回帰する時期であるとしている。[27] この時期は「エネルギー喪失（デカセクシス）」状態にあり、あらゆることに受動的になり、周囲のことに関心がなくなり、孤独を好むようになる。

ここで、筆者が問題にしたいのは、キューブラー・ロスのこのような「受容」観である。彼女は、受容という概念を、人や神とのコミュニケーションに対して消極的になり、孤立し、感情もなく、平静であり、乳幼児のような万能感に満ちた原始的ナルシシズムの状態の中にある時期としてとらえていることである。[27] 彼女は、受容の最終段階を 「デカセクシスdecathexis」と呼んでいる。デカセクシスは、死と闘い、全ての生命エネルギーを使いきった時に訪れる静謐を意味するキューブラー・ロスの造語であるといわれる。[26] [27] ちなみに、カセクシス（cathexis）は、特定の人や物、思想などにリビドー的エネルギーが注がれ、備蓄されていたものが発現することを意味するといわれる。死

は、このようなあらゆるものに対するリビドー的エネルギーを失った状態であると彼女は考えていたのだろう。このような退行的色彩が強い彼女の「受容」概念の受け止め方は、多くの葛藤や闘いの結果、心理的に成長発展を遂げ成熟した人格が、己の生を受け止める「受容」という概念とは異なるように思えてならない。[2] 確かに、彼女は、苦難は人間を成長させるレッスンであるという認識をもっていた。[20] しかし、終末期の最後の段階に現れるという「受容」のとらえ方は、あまりにも退行的でナルシスティックである。

筆者は、「受容」を心理的ではなく、スピリチュアリルな側面からとらえ直す必要もあると考えている。それは、近年、緩和医療や終末期医療の現場では、スピリチュアルケアの重要性が強調されているからである。WHO（世界保健機構）が健康の定義の中で、身体的、精神（心理）的、社会的ケアのほかに、スピリチュアルケアの大切さを指摘してから、この問題に関する関心が一挙に高まった。つまり、死にゆく患者にかかわる時、スピリチュアルケアの重要性が、患者をはじめとして、多くの医療者、援助者、家族に認知されるようになった。終末期の中でも、キューブラー・ロスが提出した5段階の中の受容期において、とくにスピリチュアルケアのもつ意味は大きいと言われている。

それでは、そもそも、ここでいうスピリット（spirit,geist）とは何か。スピリットとは、日本語では「霊」と訳され、旧約聖書における霊（ruahルーアッハ）とは、神から来る霊を指し、決して、静かさや感情のなさや、自己愛や万能感に充ちた状態ではなく、たえず成長し、人間を生かす力を与えるものとされる。[28] 新約聖書では、霊（pneuma 風、息、精神）は、風のように見えないものであり、しかも神への信仰と密接な関係にあるという。[28] そして、「ヨブ記」の背景をなしているユダヤキリスト教の身体観によれば、人間を二分法的にとらえる考え方と三分法的にとらえる考え方があり、二分法的にとらえれば、「神によって生きる人間」（pneumatikos）と「生まれながらの人間」（psychikos）とに区別される。また三分法的にとらえれば、肉的な人（carnalis＝感覚）、心の人（animalis＝理性）さらに霊的な人（spiritualis ＝霊）とに分ける。「生まれながらの人間」（psychikos）あるいは肉の人（carnalis）は、文字通り誕生してまだ時間がたっていない未成熟な乳幼児のごとく、万能感に支配され、自我が肥大し、自己愛的であって、神を認めない。[28] このような人間は、自己を超えた超越的存在（神）と人格の芯において出会おうとしない。つまり、「生まれながらの人間」（psychikos）は、霊性（スピリチュアリティ）とその現れのひとつの側面である神への信仰を有しない。[28] 筆者は、終末期の患者に対するケアにおいては、この神への信仰の基づく霊性（スピリチュアリティ）が重要な意味をもつと考えている。とくにこの神への信仰に基づく霊性は、人格の尊厳、深慮と慎み、謙虚の徳を有している。[2] 生まれながらの人間としての万能感に支配され、自我意識のみが高揚し、神への信仰に基づく霊性を欠くと、どのような事態が醸成されるのであろうか。霊性が消失ないし脱霊性化すると、信仰が死滅し、人格が堕落するとともに、徹底してニヒリズム（虚無）に陥るか、悪霊の跳梁を許し、怪しげな神秘主義なカルト集団のワナに陥る。[29]

このような認識を踏まえた上で、霊性（スピリチュアリティ）あるいは霊（スピリット）という視点からキューブラー・ロスの生き方を考えてみたいと思う。前述したように、神への信仰を伴う霊性と自己愛や自我肥大、万能感とは相容れない。[28] 筆者は、キューブラー・ロスのライフヒストリーを探っていく際に、彼女の万能感ないし自我肥大的構えの分析を避けて通ることはできないことに気がついた。そこで、彼女の万能感を育てていった要因について考えてみたいと思う。

まず第一に、彼女は数学や語学が抜群にでき、父に勘当されるという逆境にもめげずに、志望通り難関の医学部に合格したこと、幼少時から青春期まで富裕な中～上流階級の出で、経済的

になんの苦労もなかったこと、死生学に関する膨大な実績を残し、その成果を数多くの著書として出版し、その仕事が世界的に有名な雑誌「ライフ」に紹介されるなど、多くの人々に評価されたこと、全世界から講演、研修の依頼があったことなどから、彼女の場合、意識すると否とにかかわらず、万能感を助長するようになってもおかしくない環境にいたと言えるだろう。

第二に、彼女の思春期に至る発達過程における心の軌跡と万能感との関係を究明する必要がある。彼女は、すでに記したように、三人姉妹の長女で、父親は妹たちばかりかわいがり、自分は理解されず疎んじられていたことに対して、不満をもつとともに寂しさと孤独感を感じていた。そうした彼女の自己否定感（自分が受け入れてもらえないという感情）を“増幅”させ、そのことを象徴するような事件が起こった。それが例の“黒いウサギ”事件である。この事件で、彼女は深く傷つき、罪責感、不全感、自己無価値感をもつに至った。彼女の他者への＜無償＞の愛を施す姿勢や、有名になるためへのエネルギーは、見方を代えれば、自らのそうした自己否定感に伴う虚無感を補償（アドラー、ユング）し、それを償い昇華するものとして位置づけられた可能性がある。もし、彼女の強調する無償の愛[11]が純粋なものであったとするならば、いくら病苦に侵されたとはいえ、「神を呪う」と言い「自己を嫌悪する」という言葉は出てこなかったのではないか。（[註１]――なお12ページ「怒りの源」の項も参照のこと――）

ヨブ記には、サタンがヨブの考え方や信仰が真実のものであるかどうか試みる場面が出てくる。いわく、「ヨブが利益もないのに、神を敬うでしょうか。あなたは、彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか」（１：９）。「ひとつ、この辺で御手を伸ばして、彼の財産に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うに違いありません」（１：11）と。主はサタンに言われる。「それでは彼のもの一切、お前のいいようにしてみるがよい」（１：12）。彼女が40年の長きにわたって、人々に対しての無償の愛を施してきた。それにもかかわらず病苦という試練を与えることは納得がいかないと、神を呪うというのであれば、その無償の愛は、なんらかの利得ないし取引を前提とするものであって、純粋なものではなくなる。つまり、他者への無償の愛を施す強迫的な完全癖（万能感）も、もしそれが取り引きや自己愛から出たものであれば、いわゆるメサイアコンプレックスにすぎず、結局は他者からも自分自身が受け入れてもらうことができないことに対する不全感や罪責感を補償ないし埋め合わせをするためのものであると解釈せざるをえなくなる。

第三に、彼女の死にゆく患者のいわゆる５段階説を調べてみると、「否認」「怒り」「抑うつ」「受容」などのキーワードはすべて当事者が対象の中心になっている。「取り引き」の段階のみ、自分だけでなく、他者や神との関係性が問題になっているが、自分のやり残した仕事をしなければならないとか[32]、自己実現のために神に命を延ばしてほしいと望むなど、全て自分に都合のよい取り引きであって、神から試練を受けているとか、神の御旨に委ねるといった相手方の意向を聴き従うという視点は希薄である。

第四に、彼女の万能感を示唆していると思われるものに自殺に対する考え方がある。彼女は、自伝の中で、再三にわたって自殺に対する反対の意見を述べている。[29] また、医師の自殺幇助に対しても、徹底的に批判している。生命倫理学的視点から考えると、もちろん命を殺める自殺は良いことではない。また、医師が自殺を幇助し、薬物によって命を短縮することは、あってはならないことである。しかし、自殺せざるをえないほど、心身ともに苦しんでいる人間の弱さを、彼女は認めないのであろうか。あらゆる苦難に耐えうるのは強い人であり、人間の分限をわきまえない万能的宇宙感覚であるといわなければならない。事実、世界自殺予防センターのマニュアルの中には、当事者の自殺を遂行する権利を認めている。

第五に、彼女は、晩年、手足の不自由を伴い

食事にも介助を要し、半身マヒに陥り歩行も困難になった時、人の世話になることを嫌った。人の世話になることは、自分の人生にとって、「最も不得意な科目」であったと言っている。つまり、自立心、独立心の旺盛なキューブラー・ロスにとって、この病という万能感を徹底的に打ち砕く出来事によって、人の世話になること、自分がケアの対象になることなど、屈辱感以外のなにものでもなく、そのような状況自体、受容できなかった。[11] ここに、自立心の背後に隠されている彼女の万能感の一端が現わされているように思えてならない。

この章のはじめに述べたように、万能感の肥大した自我意識と、自己を超えた神への信仰を促す霊性とは対立するものであり、彼女の晩年における、神を呪い自分を憎むという他罰的で自暴自虐的な発言は、神への信仰を促す霊性（スピリチュアリティ）の衰退、欠如の兆候を示唆するものである。「自分は40年以上、神のために仕え、人を愛してきたのに、このような苦難に会わせた神を呪う」[註1][註2]「庭仕事もハイキングも歩くこともできない。いまいましい。だから、神をヒットラーと呼んだのよ。あなたは、ここに15時間も座っていたらどう思う。お茶を飲みたくても待っているだけ。そんな生活楽しいと思う。なんのために生かされているか知りたい。今の自分に満足していない。最低の毎日よ。愛の話なんてしたくないわ。自分を愛せって大嫌い。わたしの趣味ではない」と彼女は訪れた人々に語っている。[11]

ヨブも、苦難に遭遇し、同じようなことを言っている。「もうたくさんだ。いつまでも生きていたくない。ほうっておいてください。わたしの一生は空しいのです」（7：16）「わたしは暗黒を前にし、目の前には闇が立ちこめているのに、なぜ滅ぼし尽くされずにいるのか」（23：17）「わたしは、自らの正しさを固執して譲らない。一日たりとも心の恥じるところはない」（27：6）と、強気の姿勢で自己を正当化していたヨブ。そのヨブが苦難を象徴する暗黒と闇を前にして、虚無と孤独に苦しみ、死を願っている。

ところで、すでに筆者は、霊性が枯渇し神への信仰を失うと、自我意識や万能感が顕在化し、たとえばオウム真理教のようなデーモンに憑かれた集団や呪術的で悪質なカルトに転落する可能性があることを、すでに指摘した。キューブラー・ロスは、死にゆく患者への援助を行っているうちはよかったが、臨死体験や死後生の研究にのめり込んでいくうちに、怪しげな霊媒師（チャネラー）と出会い、異界にいる死後の霊と交信（チャネリング）するグループに参加するようになった。チャネラーは、憑依、トランス状態にあって、死者を呼び出し会話する。夫は、科学者として、そのような活動を受け入れることができなかった。彼は、そうした活動に関与することを止めるように彼女に忠告したが、彼女は止めなかった。チャネリングは、夫婦げんかの種であった。そのような状況の中で、チャネリングを行うグループの一員が、性的過ちを犯し、被害者から職権乱用の申し立てを地方検事局に提出した。被害届を受けた警察は、その集団に捜査のメスを入れた。このグループが、彼女の夫の持ち物で、彼女に貸してあった土地を使っていたこともあり、夫は、彼女と離婚することを宣言すると同時に、その土地を売却。その結果「シャンティ・ニラヤ・ヒーリングセンター」は存続できなくなった。その後、彼女はその施設を、虐待防止を目的とする団体に贈与した。

彼女の神秘主義的傾向は、中高年期になって、突然生じたわけではない。その源泉をたどっていくと、すでに医学部を卒業し専攻を決める時代にさかのぼることができる。彼女は、確かに、生涯、精神科医としてすごしたが、最初からいわゆる精神科を志望していたわけではない。それどころか、精神科は「わたしの進路希望のリストの最下位に位置していた」とさえ言っている。実際に彼女が実践してきた診療の内容を調べてみると、対象としたのは、精神科で最も多い統合失調症などにはほとんど興味を示さず、頭脳はしっかりしているがん患者であった。精

神医療の中核はなんといっても統合失調症である。この病気は、古くは「早発性痴呆」(E.クレッペリン)といい、思春期に好発し認知機能障害をもたらす難しい病気である。また、彼女の母親が植物状態に陥った時、それを受け入れられず強く反発している。数学と語学に秀で、論理的で、頭脳明晰な彼女にとって、こうした精神病や植物状態は了解しがたいものであったに違いない。そのような彼女が、なぜ霊媒師などが関与する怪しげなカルト集団にひっかかったのか。

ここで、やや話が唐突で論理が飛躍していると批判されるかもしれないが、筆者は多くの犯罪を犯したカルト集団であるオウム真理教に入信した者の多くが、日本でもトップクラスの国立大学(当時)や有名私立大学理系出身者の若者でかためられていたことを思い出す。なぜ超一流の頭脳をもつ彼らが、神秘主義的修行や空中遊泳などを売り物にする教祖に魅かれ、カルト集団に入信していったのか。教祖をはじめとするこれらのエリート信者に共通しているのは、宗教や信仰を看板にしているが、教祖を頂点とした「位」が上がるにつれて万能感を満足させ、自我を肥大化させ、自己神化していく構造になっていることである。このような自我構造のもとにあっては、理性(良心)と霊性が統合されないばかりか、霊性の欠如によって、理性や良心の透明さは損なわれる。[25]

アンセルムスは、「知解を伴う信仰」ということを言っており、信仰の論理の内実を支えるために、理性や知性が必要であることを強調している。[31] 彼女が、霊媒師をとおして、死後霊への探求に向かったことは、真の霊性(良心や理性を含有する)とそれに伴う神への信仰からの逸脱を意味するものではないか。

これまで、キューブラー・ロスの神秘主義的傾向について、やや批判的に論じてきた。しかし、そうだからといって、彼女の学問的業績や愛の行動の価値は、決して消え去るものではなく、普遍性をもっている。彼女は、長年の間、仲違いし、彼女を勘当した父に対して、臨終の床で和解し、誠意のこもったケアをしているし、夫のマニーが臨死状態に陥った時も、旅先から急遽駆けつけ介護している。また、最晩年になって、家族を犠牲にして、寂しい思いをさせた娘と息子と和解し、彼らと孫に囲まれて旅立っていった。彼女の終の住処となったグループホームには、娘や息子、孫の写真が部屋いっぱい飾られていた。[11] このように彼女は、人生の重要な分岐点において、やり残してきた課題(unfinished business)をきちんとやっていることは銘記されるべきである。[32]

ところで、己の生を呪い、生きる意味を問い、苦しみの中で悩み、死をも考えたヨブは、最後にどのような顛末をたどったのであろうか。教育者のエリフは、人間には「全能者を見出すことはできない」(37:23)、人間は限界ある存在であると述べている。彼がこのように言ったのは、苦難の意味を含めて、人間には究めることができない問題が山積みされていることを指摘したかったのではないか。なんでも問題解決できると考えるのは、人間のおごりであると。ヨブも苦しんだ末に、「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました」(42:2)と言う。生老病死に関する問題を含めて、人間や自然界の中で生起する出来事について、われわれには理解できないことがたくさんある。そのことをヨブは悟ったというのである。悟りとは人間の努力や能力によって得られるものではなく、神の霊による信仰によって気づかされるものである。「わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました」(42:3)とヨブは自らのこれまでの態度を反省し、「自分を退け、悔い改めます」(43:6)と告白し、神と和解した。この「自分を退け」という箇所は重要であり、「自分を退け」てはじめて悟り、つまり、気づきが与えられる。そして、彼は、それまで敵対視していた友だちや妻のために祈った。その結果、ヨブは多くの財産と子どもが与えられ、以前にも増して祝福された。ヨブは、これまで自分の立場を絶対化し、己の強さ、万能感、自

尊心、自立心に固執、いつのまにか自我が肥大化し、宗教的傲慢に気づかず、砕けた魂をもって、神に悔い改めることを敗北とみなしていた。ヨブ記において、神は、苦難の意味や目的について、直接応答していない。しかし、K.Rahnerが言うように、死や病など自己超越的な問題にかかわるテーマは、人間がコントロールできない神秘的な部分を有している。[33] われわれも病や死に関して、このような謙虚な姿勢をとる必要がある。

子どものように無垢な心をもち、義しい人であったヨブは、悟りの霊によって己を無知を悔い改めさせられ、神と和解した。キューブラー・ロスも無垢の魂の持ち主であり、子どもや家族、弱い人、死にゆく人を愛した。また死の問題を徹底的に研究した学者でもあった。さらに「人生に起こる全ての苦難や神がくだした罰のようにみえる全ての試練は、じっさいには神からの贈り物である」という発言[37] などから考えると、彼女自身は異議を唱えるだろうが、究極的には彼女は義人の系譜に属する偉人であり、信仰の人であったといえるだろう。彼女は仲違いした父やさみしい思いをさせていた子どもや離婚した夫と和解し、最後は家族に囲まれて死んでいった。これらの人々と彼女が和解したということは、彼女がこまでの言行を悔い改めたということであろう。このことを思う時、ヨブのように、彼女自身、言葉においての罪を告白し、神に対して悔い改めたという事実は、明らかにされていないものの、難しい「再三にわたる脳卒中による苦しみ」というレッスンを通過し、そのことがイニシエーション（加入儀式）となり、神の祝福のうちに旅立っていったと考えたい。

7. まとめ

キューブラー・ロスのライフヒストリーを検討しながら、彼女の死生観について研究を行った。とくに彼女の処女作である「死の瞬間」の中で呈示された「患者は、5段階の心理的過程をたどって死に至る」とする考え方に注目し、この理論の中に、彼女の死生観がどのように反映されているのかということを、自伝を参考にしながら分析を加えた。さらに、彼女の病や死に対する怒りと受容の問題に焦点をあて、キューブラー・ロスと旧約聖書に登場する義人ヨブとの考え方を対比しつつ、両者の類似点と相違点を明らかにするとともに、現代に生きるわれわれ自身の病や死に対する受け止め方を模索した。

文献

1）キューブラー・ロス（上野圭一訳）「人生は廻る輪のように」．角川書店．2003．176頁
2）L, Bregman, Death and Dying, Spirituality and Religions. American University Studies,2003.13－15頁
3）R, Stanworth, Recognizing spiritual needs in people who are dying. Oxford University Press. 2004. 13－16頁
4）前掲書1）144－148頁
5）竹内静江，キューブラー・ロスのワークショップにて，64(2)：374－379．看護学雑誌．2004
6）新聖書大辞典，キリスト教新聞社．s 46.「義」の項（361－364頁）参照
7）前掲書1）333－336頁
8）前掲書1）346頁
9）前掲書1）369頁
10）前掲書1）370頁
11）NHK教育テレビ2004．12.25放映．キューブラー・ロス「最後のレッスン」より
12）前掲書1）47－48頁，187頁
13）前掲書1）199－200頁，254頁
14）平山正実，緩和ケアとデスエデュケーション，227：66－70頁．2002
15）フェアベーン，W.R.D.（山口泰司訳）「人格の精神病理学的研究」．文化書房博文社．2002．338－339頁
16）前掲書1）255頁
17）前掲書1）13－16頁
18）米沢慧，ホスピス考（第4回）7月号．78頁．ばんぶう．2000
19）前掲書1）365頁，369頁，370頁
20）キューブラー・ロス（上野圭一訳）「ライフレッスン」角川書店．2004

21) 米沢慧，ホスピス考（第3回）6月号．79頁．ばんぶう．2000
22) 前掲書1）189頁
23) 前掲書1）153頁
24) 前掲書1）362頁
25) 米沢慧，ホスピス考（第5回）8月号．83頁．ばんぶう．2000
26) 菊池和子，命の教育再考．エリザベス・キューブラー・ロスの死を悼んで，45(12)：1086－1089．看護教育．2004
27) E．キューブラー・ロス（鈴木晶訳）「死の瞬間」――死とその過程について――中公文庫．2004．203頁
28) 金子晴勇，ルターと現代の霊性，4：1－18．日本ルター学会研究年報．2002－2004
29) 前掲書1）198頁
30) 11）を参照した
31) 新カトリック大辞典（Ⅰ），研究社．1996．「アンセムス」の項（202－265頁）参照
32) 青柳路子，E．キューブラー・ロスの思想と死にゆく子どもの問題，40：67－75．東京大学大学院教育学研究科紀要．2001
33) Rahner, K., The experience of God today, In Theological investigations, Ⅱ. Darton, Longman and Toll, London, 1974. 160頁
34) 前掲書1）374頁

［註1］

「神を呪う」というキューブラー・ロスの発言をめぐって、聖書の神観について、若干補足しておきたい。聖書では、呪いは、裁きや災禍や死など、忌まわしい出来事と関連して用いられることが多い。たとえば、ヨブの妻が、ヨブに向かって語った有名な「神を呪って死になさい」（ヨブ記2：9共同訳、新改訳、日本聖書協会訳）という言葉がある。いずれの訳も、ヨブの妻は、神とヨブに対して否定的な判断を下している。ところが、旧約聖書翻訳委員会訳（並木浩一訳）では、「神を讃えて死になされ」となっている。この訳では、ヨブの妻は、神を肯定的にとらえ、ヨブの現状を否定的に見ている。つまり、並木訳では、神を讃える存在、つまり神が人間に祝福を与えるものとしてとらえ直されている。この他、「私たちは、罪を犯し逆らいました。常に変わらぬ恵の御業をもって（中略）あなたの思いと憤り（呪）を翻して下さい」（ダニエル9：16）とい言葉がある。新約聖書で、これらの文脈に沿った言葉を探ってみると、「わたしたちは、舌で父である方を賛美し、また舌で神をかたどって造られた人間を呪います」（ヤコブ3：9）がある。この個所でも、神を肯定的にとらえ、人間を否定的に見ており、ヨブ記の並木訳と、文脈において共通点を有する。現実が苦難の中にあって呪われたような状況、あるいは、死に瀕する事態に直面しても、神は恵みと憐れみに満ちた方であるから、われわれを救って下さるし、またその祝福を与えてほしいという願望と信仰が記されていると解釈できるように思う。このような文脈の中で、冒頭に掲げたキューブラー・ロスの「神を呪う」という言葉を受け止めることができれば、彼女の一見すると神を否定するような涜神的な死生観も、それとは異なった見方――つまり、自らの罪を悔い改め、神に自分の苦しみを訴えて、神からの祝福と恵みが与えられることを祈るという意味にも解釈できるといえよう。

［註2］

キューブラー・ロスは、最晩年になっても「自分の頭ははっきりしている」と述べている。彼女の怒りの理由のひとつとして、度重なる脳梗塞による感情失禁や人格変化によるとする考え方もできるかもしれないが、すでに四十代に母が植物状態に陥った時、その不条理性に怒り、神を呪ったという供述が見られるから、彼女の最晩年における神への呪いの言葉は、生理学的理由というよりも、むしろ彼女の実存的姿勢によるものだろう。

キューブラー・ロスの生き方との比較において、これと同じような境遇でありながら、詩人として生涯を送った水野源三の生き方に教えられるところが大きい。彼は小学生の時、集団赤痢に罹患、その後遺症で脳性マヒになり、47年の生涯の間、40年以上にわたって立てず歩けず口もきけず、まばたきをする以外に意志表示の手段を全て奪われた。彼の詩を参考のために挙げておく。「わたしのまばたきを見て／一字一字拾って詩を書いてもらう／一つの詩を書くのに十分、二十分、三十分／義姉の愛と忍耐によって／一つ二つ三つの詩が生まれる／神さまに愛され生かされている喜びと感謝を詩に歌い続ける」
「こんな美しい朝に」（水野源三の世界）いのちのことば社
聖書からの引用に際しては、下記のテキストを用いた。

『聖書』（新共同訳）共同訳聖書実行委員会．日本聖書協会．1987